

志賀

古名

黒主

又

志賀黒主

世阿弥作

前

ワキ 官人

シテ 樵の翁

ツレ 樵夫

後

ワキ 前に同じ

シテ 大友黒主

地は 近江

季は 三月

「道ある御代の花見月。く。都の山ぞ長閑けき。

詞

「そもく是は当今に仕へ奉る臣下なり。さても江
州志賀の山桜。今を盛なる由承り及び候ふ程に。
唯今志賀の山路へと急ぎ候。

道行

「春の色。棚引く雲の朝ぼらけ。く。長閑けき風
の音羽山。今朝越え来れば是ぞ此。名におふ志賀
の山越や。湖遠き詠めかな。く。

詞

「急ぎ候ふ程に。江州志賀の山に着きて候。暫く此

所に候ひて花を詠めうずるにて候。

シテ、ツレ一声

「さゝ波や。志賀の都の名を留めて。昔ながらの山
桜。

ツレ

「春に馴れてや心なき。

二人

「身にも情の残るらん。

シテサシ

「山路に日暮れぬ樵歌牧笛の声。

二人

「人間万事様々の。世を渡り行く身の有様。物毎に
遮る眼の前。光の陰をや送るらん。

下歌 「余に山を遠く来て。雲又跡を立ち隔て。

上歌 「入りつる方も白波の。く。谷の川音雨とのみ。

聞えて松の風もなし。実にや誤つて。半日の客たりしも。今身の上に知られたり。く。

ワキ詞

「不思議やな是なる山賤を見れば。重かるべき薪に猶花の枝を折り添へ。休む所も花の陰なり。是は心有りて休むか。唯薪の重さに休み候ふか。

シテ詞

「仰せ畏つて承り候ひぬ。先薪に花を折る事は。道

のべの便の桜折り添へて。薪や重き春の山人と。

歌人も御不審有りし上。今更何とか答へ申さん。

ツレ

「又奥深き山路なれば。松も檜原も多けれども。

取り分き花の陰に休むを。

シテ

「唯薪の重さに休むかとの。仰せは面目なきよなふ。

二人

「さりながら彼黒主が歌の如く。其様賤しき山賤の。薪を負ひて花の陰に。休む姿は実にも又。其身に応ぜぬ振舞なり。許し給へや上臈達。

ワキ「こは如何に優るをも羨まざれ。劣るをも賤しむなとの。古人の掟は誠なりけり優しくも。古歌の喩への心を以て。今の返答申したり。

シテ「いや／＼古歌の喩へとやらんも。更々知らぬ身なれども。賤しき身にも思ひよりて。

ワキ「彼大友の黒主が。心を寄する老の波。

シテ「和歌の浦わの藻塩草。

ワキ「かく喩へ置く世語の。

シテ「それは黒主。

ワキ「是は誠に。

シテ「さまも賤しき。

ワキ「山賤の。

地「身には応ぜぬ事なれど。許させ給へ都人。とても
の思出に。花の陰に休まん。実にや今までも。筆
を残して貫之が。言葉の玉のおのづから。古へ今
の道とかや。／＼。

地クリ

「夫れ賢かつし時代を尋ぬるに。延喜の聖代の古へ。国を恵み民を撫でゝ。万機の政を治め給ふ。

シテサシ

「然れば其御時に至つて。和歌の道盛んにして。古へ今の詠歌を撰び。

地

「二聖六歌仙を始めとして。其外の人々は。野辺の葛のはひゝろごり。林に茂き木の葉の露の。色に染み行く歌人の。心は花になるとかや。

シテ

「実に埋木の人知れぬ。

地

「ことわざまでの情とかや。

クセ

「そもく難波津浅香山の。影見えし山の井の。浅くは誰か思草の。露行き霜来る色なれや。浜の真砂より。数多き言の葉の。心の花の色香までも。妙なりや敷島の。道有る御代の翫び。然れば三十一文字の。神も守護し給ひて。無見頂相の如来も。感応垂れ給へば。君も安全に。万民時を樂しみて。都鄙円満の雲の下。四海八洲の外まで

も。波の声万歳の。響きは長閑けかりけり。

シテ「今天皇の御代久に。」

地「万の政の。道直ぐに渡る日の。東南に雲をさまり。

西北に風静かにて。言葉の林栄ゆくや。花も常磐の山松の。巷にうたふ声までも。是れ和歌の詠に漏るべしや。天地を動かし。鬼神も感をなすとかや。

ロンギ地

「実にや異なる山賤の。く。家路いづくの末なら

ん。ゆかしき心なるべし。

シテ

「今は何をか包むべき。其いにしへは大友の。黒主といはれしが。時代とて此山の。神とも人や見るらん。

地

「そも此山の神ぞとは。不思議やさては大友の。

シテ

「それは黒主が家の名の。

地

「大友か。

シテ

「我はたゞ。

地

「薪負ふ友もなくて。独り山路の花の陰に。長休み
しつる恥かしやと。夕べの雲に立ち隠れて。志賀
の宮路に帰りけり。く。(中入)

ワキ歌

「いざ今日は。春の山辺にまじりなん。く。暮れ
なばなげの花の陰。月に詠じて天の原。時の調子
に移り来る。舞歌の声こそ新なれ。く。

後ジテ

「雪ならば幾度袖を払はまし。花の雪吹の志賀の山。
越えても同じ花園の。里も春めく近江の海の。志

賀辛崎の松風までも。千声の春の長閑けさよ。海

越に。見えてぞ向ふ鏡山。

地

「年経ぬる身は老が身の。

シテ

「それは老が身これは志賀の。

地

「神の白木綿かけまくも。忝しや神楽の舞。(神舞)

ロンギ地

「不思議なりつる山人の。く。薪の斧の永き日も。
残る和光のあらたさよ。

シテ

「実に惜しむべし君が代の。長閑けき色や春の花の。

塵に交はる雪ならば。踏む跡までも心せよ。

地 「実に心して春の風。声も添ふなり御神樂の。

シテ 「小忌の衣の色はえて。

地 「花は梢の白和幣。

シテ 「松は立枝の。

地 「青和幣。かくるやかへるや梓弓。春の山辺を越え
来れば。道も去りあへず散る花の。雲の羽袖を返
しつゝ。紅の御袴のそばを取り。拍子を揃へて神

かぐら。実に面白き奏かな。く。